

を理解しようとするれば、必然的に「民族」とか「国家」、あるいは「文化」の概念が明晰でなければならないからである。ところが、現実はこちらの言葉にさらに欧米語が重なって、事態はいっそう錯綜している。とくに、カナダの現実を理解するという目的に即して若干自説を開陳しておきたい。

1) race, nation, ethnicity (ethnic group) (慣例的な日本語訳：人種、国民・国家・民族、エスニシティ、あるいはエスニック集団)

カナダを、multi-racial, multi-national, multi-ethnic society (state) と性格づけるとき、その意味に大差はないというのが私論である。もちろん、過去の議論を振り返るならば、人種と民族とエスニシティの間に何の区別もないというのは暴論であろう。しかし、人種が客観的（生物学的）基準、民族が主観的（文化的）基準、そしてエスニシティが戦略的（用具的）基準に基づく人間（集合体）の分類であるとしても、たとえば、racism（人種差別主義）が人間の生物学的な差異のみを根拠に行われるわけではなく、それが人種の意味解釈（たとえば、宗教的・イデオロギー的）を踏まえたり、また潜在的にはあれ社会的利害状況と結びついているということも大いにありうることなのである。要は、歴史的コンテキストの中で（複数の要素を内包する）同様な現象の異なった側面がより重要な意味を持ち、それに研究者（同時に、当事者）の関心が集中するので、異なった言葉が＜発明＞されるといってもよい。たとえば、エスニシティは、多民族社会（国家）の利害状況的な文脈の中で互いに競合する民族集団の生態を記述・分析するための概念として1950年代以降アメリカで使われるようになり、そうした状況が世界的に拡散する中で広く採用されるようになった。そして、この場合の民族集団の行動は、かつての古典的な民族国家、民族主義、民族運動に見られたそれとは大いに異なっていた。しかし、今でも旧ユーゴスラビアに見られるような「民族浄化」を ethnic cleansing と呼ぶのはかはないのである。

以上のことを勘案すると、次のような整理が可能であろう。まず、人種であるが、これは生物学的（身体的）差異に注目するとはいえ、黒人（ニ

グロイド）、白人（コーカソイド）、黄人（モンゴロイド）以外に一体人類を何種類のどのような人種に分けるのかということについて科学的に定説があるわけではなく、従って、私はこれを民族関係では＜可視性＞の問題として扱っている。エスニック集団は、上に記したニュアンスを除けば、民族とほぼ重なる。ともに、歴史的に構成された概念であり、理想型としては特定の純粋な人種としての血統、共通の文化的要素（言語、宗教、風俗、習慣など）、共通の歴史的体験とその意味を共有し、そしてできれば固有の国家や領土を持ちたいと望み、同一の集団に属するという帰属意識と共にその集団に対する強い忠誠心を抱いている人々の集団である。ただ、これはあくまでも理想であって、現実の多くの民族、あるいはエスニック集団は様々な要素を欠落させたままであるし、あるいはある特定の要素を強調するという場合もある。問題は、次に見るように、nation と state が混乱して使われたため、あるいはまた nation-state が「国家」一般とほぼ同義に使われたため、national のレベルがある一定の政治的共同体に結びつけられたことである。そのため、たとえば、現在、ethnic economy を national economy とは呼びがたい。同様に、ある国家（state）に対する法制度的な帰属を示すのに nationality（国籍）ということばが使われているのである。

2) nation, state, nation-state, society, political community (慣例的な日本語訳：民族、あるいは国家、国家、民族（国民）国家、社会、政治的共同体)

The United Nations と The United States of America という用法があるが、前者はいうまでもなく第2次世界大戦後につくられた国際連合（主権国家の集合体）であり、後者は18世紀後半にできた連邦国家である。アメリカ合衆国は、既に高度な自治権（法的支配機構）を持っていた13の州（国家）が連合して「諸国家の国家」をつくったわけだ。しかし、国際連合は国家の集合体にもかかわらず＜民族＞の集合体としたのは、当時の＜民族＝国家＞という民族主義イデオロギーに引っ張られていたからだというのが私の考え方である。